

すみれ学級を財団法人に移行した理由について

一般財団法人すみれ学級 理事長 藤井 富生

すみれ学級は、お腹を空かし、宿題も手につかず、母、父の保護者の帰りを待つ子どもたちに「ささやかな食事を提供し、子どもたちの勉学を支える」ためにつくられました。

すみれ学級は、2016年8月に始めましたが、この10ヶ月の経験から子どもの貧困は大都市固有のものではなく地方都市を含め、全国規模で拡大しているということです。

資料に明らかなように、敷戸小学校全員で296名、そのうちすみれ学級を体験した児童は約58名で19.6%に及びます。

これを大分市の小学生26,930名（2015年）に適用しますと、実に5,278名もの多数に達します。

全国規模で見ますと、雑になりますが政府統計によりますと、5歳から9歳523万人、10歳から14歳548万人、合計1,071万人の幼児・児童がいます。貧困率は6人に1人とされていますから、日本全国では179人の子どもたちが貧困に喘いでいるということになります。

こうした状況を打破するためには、すみれ学級を2組、3組と増やしていく必要があります。これまで、すみれ学級は株式会社そうりんの単独で運営してきましたが、すみれ学級を増やしていくためには、株式会社そうりんの財力だけでは無理があります。

そこで、財団とし、広く協力者を募り、ゆくゆくは公益法人にし、規模を拡げることで、すみれ学級を大分県内にいくつも作りたいと考えています。

これが、第一の理由です。

すみれ学級を増やし継続するためには、若い人材が必要です。

子どもの貧困は、現在の政治・行政の貧困に原因があるため、すぐに解決できません。子どもの貧困が言われ始めて20年近くたち、改善の余地すらなくかえって悪化するばかりです。

すみれ学級の必要性は、相当長期に20年間以上続くことは間違いありません。

この長期に渡る事業を支えるためには若い人材が必要です。

財団法人は、「財団法人に就職し、結婚し、子どもを産み、十分な教育を受けさせる事ができる給与」を支払うことができるようにならなければ、すみれ学級の維持、発展はできません。単なる自己満足に終わります。

100万人を遥かに超える子どもの貧困をなくすには、すみれ学級は無力です。

しかし、子どもたちの貧困をなくす「支点」にはなれません。

古代ギリシャのアルキメデスは、「私に支点を与えよ。されば、地球を移してみせる」といったそうです。

皆で協力して、すみれ学級を子どもの貧困をなくす「支点」としましょう。

そうした理由から、すみれ学級を財団に移行しました。

運営内容は、株式会社そうりんの運営していた「すみれ学級」と全く同じです。

コンビニには、弁当も食べ物もたくさんあります。スーパーには、もっとたくさんの食べ物があります。テレビでは、おいしいレシピが放映されます。

周囲の多くが飢えている状況ではあきらめもつくでしょうが、周囲に有り余る食べ物がある中で飢える子どもたちの心の渇きと痛みはどれほどあることでしょうか。

子どもたちを飢えさせてはなりません。

皆さん、力を合わせて、子どもたちに食事と教育の支援をしましょう。

数多くの皆さんのご支援を切に希望する次第です。

2017年5月1日